

5. 韓国元一流競技者のライフヒストリーに関する研究

はじめに

18世紀から19世紀初頭にかけて、イギリスのブルジョアジーの独占物であったスポーツは、今日、世界中の人々によって行われるまでに普及した。こうした「スポーツの現代化」^{注1)}の歩みの中でスポーツは、巨大かつ複雑な社会現象として、我々の生活の多方面にわたり様々な影響を与えてようになってきている。

P・ブルデューは、現代スポーツの特徴^{注2)}の中で現在のスポーツは大規模に商品化され、専門化することによってプロ化（プロフェッショナル化）の進行が目立ってきているという。スコット（1971）が18世紀から19世紀初頭にかけてのアマチュアの定義にあてはめることができるトップ競技者はほとんど皆無であると述べているように^{注3)}、現在、競技者のプロ化が進行している。各スポーツ集団内における生存競争は激化し、従って、一人の一流競技者を輩出するためには、多くの中途離脱者を生む結果を招いている。

競技生活は、個人の人生の中で、複合的なキャリアの中の一つに過ぎない。現在、スポーツ競技のスキルとテクノロジーの高度化に伴って、スポーツ競技者がスポーツへ傾倒する程度はさらに大きくなり、そこでは、ある種一般生活から乖離され、競技に専心することが求められている。そのような背景を持つスポーツ競技者達が引退後に一般社会へ参入していくことは、非常に困難な体験となってしまう場合もある。そういったこととは裏腹に、これまでに行われてきたスポーツ科学領域における研究の多くは現役スポーツ競技者を対象にしてきており、そこでは、スポーツ機能の有効性のみが論じられてきた。そのような取り組みと比較すれば、引退後の社会生活への社会化に困難をきたす元競技者に対してアプローチしようとする研究は明らかに少ないといえる。

韓国においても、昨今の情報化にあって、一流競技者の活躍は、マスメディアを通じて華麗な栄光として多くの大衆に知らしめられている。それとは裏腹に、競技を通じて蓄積した身体化された

キャリアが引退後に競技者個人にどのような意味を持ち、その後の個人の歩みにどのような影響を与えるのかという問題は、これまで十分に検討されてはこなかった。

本研究では、韓国一流競技者としてスポーツの卓越に人生の多くを費やしてきた元スポーツ競技者と彼らを支えてきた関係者達から得られた語りを中心に、元スポーツ競技者がこれまでどのような人生を歩んできたのか^{注4)}を明らかにする。そして、彼らが韓国の社会や文化においてどのような意味や価値を持ち、スポーツキャリアが引退後にどのような形で社会に受け入れられていくのかを明らかにする。

5-1. 先行研究の検討

ここでは、既に、韓国・日本・欧米において行われた、一流競技者がスポーツに関わりを持つようになってから引退後の社会的適応までを扱った研究を概観する。

1) 韓国一流競技者に関する先行研究の検討

スポーツ競技者の階層に関する先行研究を通してわかることは、儒教思想の影響により韓国の競技者の家庭の経済的地位が一般的に低いということである^{注5)}。韓国は1980年代から高度経済成長を成し遂げ、社会全体の階層の底上げが促進されており、一言に社会移動といっても、時期によってその状況が異なることは明らかであり、そういった年代的な時間差の問題を考慮しなければならないのは自明である。しかし、こうした階層の低い競技者達が、家族の経済的支援のない状況下にあってスポーツ競技を始める背景には、彼らがスポーツを媒介として上昇的社会移動を志向していることがうかがわれる。

一方、スポーツへの社会化に関する先行研究の中では、彼らが最も影響を与えた人物は教師、監督やコーチとされている。これらの示唆は、質問紙法による量的な集団調査によって得られたもの

であり、これらの要因が競技者個人に及ぼす影響の程度を明らかにするまでには至っていない。また、実際に個々の競技者が具体的にどうやって社会化されてきたのか、というプロセスも明確にされてはいない。

競技引退を課題とした先行研究をみると、韓国の体育・スポーツ社会学領域において、初めて引退の問題を取り扱ったのが徐（1997）であり、近年に至っても、その他の報告をほとんど認めることはできない。

徐（1997）は、「引退したプロ競技者の社会適応に関する研究」の中で、韓国のプロ野球、プロ民族相撲、プロサッカーから引退した競技者を対象とした。そこでは、質問紙と個別面接による調査から得られた結果より、韓国のエリートスポーツは、学校スポーツを母体にし、それに繋がる実業団とプロスポーツによって支えられていることが示唆された。しかしながら、そのような高い競技レベルにあった元競技者が中学校、高校、大学や実業団、プロから引退する理由は、明らかにされなかった。

韓国の体育・スポーツ社会学領域において、徐（1997）が果たした役割は大きい。スポーツ競技者の生活史（life-histories）に注目し、包括的に競技者を捉えようとした試みは、これまでに類をみない新しい研究アプローチを提案している。しかし、彼はスポーツへの参加や引退を生活史の一部として捉えることを主張しているものの、引退の動機や引退後の生活状態のみに注目しており、必ずしも競技者自身を包括的に捉えられてはいない。また、彼の行った面接調査の内容も、調査者によってその項目が限定されており、そこからは、個々の元競技者がスポーツ界、周囲の世界を主観的にどのように捉えているのかについて何ら明らかにされてはならず、また、彼らを取り巻く社会的制度との関連性も考慮に入れてはなかった。

このように、韓国のスポーツ競技者に関する社会的な研究領域において、競技引退を課題とした研究は、徐以外は認められず、この領域の研究が不足していることは明らかである。また、それぞれの研究が社会化、階層、引退など、競技者のある一定時期のみを対象とした断片的なアプローチであることから、競技者の人生を長いスパンか

ら捉えられてはいない。このような歴史的な観点の欠如、また、彼らを取りまく社会環境や文化について検討されていないことは、今後の研究展開において大きな課題であるともいえよう。

2) 競技引退に関する先行研究の考察

体育・スポーツ社会学領域において、一流競技者がスポーツ競技を開始するときから引退後の社会に適応するまでを扱った韓国・日本・欧米研究を概観した結果、以下のことが明らかになった。

第1に、欧米に比べて韓国、日本では元競技者に対する研究が不足しており、一流競技者に関する研究においては、その殆どが現役競技者に向けられていた。

第2に、従来の研究の中では、元競技者がスポーツを始めた過程、競技を継続している時期の問題、引退後の生活等について、それぞれが断片的に検討されているに過ぎず、競技者の人生をトータルに捉える立場からアプローチしている訳ではなかった。また、競技者が現役時代と引退後にどのような社会的支援を受けているのか、また、そういった問題を社会の文化や制度と関連づけて分析している研究も全く認められなかった。

3) 本研究の意義

本研究は、第1に、競技者がスポーツ競技を始める時から引退後の社会に適応するまでをトータルに捉えていること、第2に、聞き取り調査によって、より具体的な事実を抽出し、それを競技者自身がどのように捉えているかということ明らかにしようとしたこと、さらに、第3に、韓国の社会、文化、制度などとの関係の中で検討を加えたこと、など、これまで行われてきた研究報告とは異なり、より包括的にスポーツ競技者を捉えようと試みている点で大きな意義があるといえる。

こういった試みは、従来の競技者に関連した研究に新たな視点を提供するのみならず、競技者を支援していく諸制度を再考するための基礎データを提供することにもつながるだろう。

5-2. 研究の方法

調査は2つの側面からアプローチされた。第1に、引退した競技者へのインタビュー調査、第2に、彼らを支援する立場である企業の担当者や競技者の育成に関わっている国家機関の公務員へのインタビューを実施した。また、必要によって、元競技者には、2回以上の面接を実施している。加えて、関連する文書資料（スポーツ関連公共記録、スポーツ雑誌、新聞等）の収集も行った。

インタビュー項目の詳細は、以下の通りである。

1) 引退競技者への主なインタビュー内容

家族関係や家族の経済・文化的な環境
スポーツへの社会化における過程
特待生としての学校生活
社会的な支援の変化
引退の契機と引退後の生活
引退後の競技キャリアに対する社会の反応や理解
将来の計画

2) 企業や国家の関係者

スポーツ団の育成の目的や範囲
選手に対する支援（報酬、勤務時間、練習時間、年金、遠征等）
引退後の支援
競技キャリアの社会的な地位
韓国社会における一流競技者に対する支援の問題点

3) 研究の対象

調査対象は、韓国においてかつて一流競技者として活躍し、既に引退している競技者を対象とした。彼らは、韓国政権がスポーツに力を入れた第5・6共和国の時代、個人種目の国家代表として1986年アジア大会や1988年ソウルオリンピック大会時に競技者としての全盛期を迎えた5名である。以下には対象者の簡単なプロフィールを紹介する。

(1) A氏

・年齢：38歳

- ・家族関係：出生時一父母，7人兄弟の長男
現在一妻，1男1女
- ・出身地：韓国全北
- ・専門競技の開始時期：中学校3年生
- ・競技種目：陸上競技・長距離
- ・主な競技成績：81年 国際マラソン4位，86年アジア大会金・銀メダル 国家代表経験あり。
- ・引退後の状況：引退後にレストランや不動産経営の後、日本式うどん店を手伝うが98年経営悪化で閉店。現在はソウル市内の中学校の陸上コーチをしている。

(2) B氏

- ・年齢：37歳
- ・家族関係：出生時一父母，2人兄弟の長男
現在一妻，1男2女
- ・出身地：韓国ソウル
- ・専門競技の開始時期：小学校2年生
- ・競技種目：スケート短距離
- ・主な競技成績：中・高校時には全国1位，国家常備軍経験あり。
- ・引退後の状況：引退後に大学院に進学，修了後はソウルの東大門で家業（服の卸業）に関わっている。

(3) C氏

- ・年齢：38歳
- ・家族関係：出生時一父母，2人兄弟の次男
現在一妻，1女
- ・出身地：韓国ソウル
- ・専門競技の開始時期：中学校2年生
- ・競技種目：テコンドー
- ・主な競技成績：アジア選手権優勝，国家代表経験有り。
- ・引退後の状況：引退後に師範大学を卒業後中学校の教師。

(4) D氏

- ・年齢：37歳
- ・家族関係：出生時一父母，2人兄弟の長男
現在一妻，1男1女
- ・出身地：韓国慶畿
- ・専門競技の開始時期：高校1年生
- ・競技種目：陸上競技・十種競技

- ・主な競技成績：道（県）代表，国家代表経験なし．
- ・引退後の状況：引退後に中・高の陸上競技コーチを8年間勤務，その後，起亜自動車に入社，98年退社して現在事業を起こすために準備中．

(5) E氏

- ・年齢：39歳
- ・家族関係：出生時一父母，2男1女の次男
現在一妻，1男1女
- ・出身地：韓国忠南
- ・専門競技の開始時期：大学3年生
- ・競技種目：陸上十種競技
- ・主な競技成績：全国国体4回優勝，国家代表経験有り．
- ・引退後の状況：怪我で国家代表から下ろされ，大学院に進学．修了後に非常勤をしながらさらに博士課程に入り，課程修了と同時に大学教授になった．

5-3. 元一流競技者のライフヒストリー

ここでは，韓国社会におけるスポーツの現状を踏まえた上で，一流競技者に注目する．個々の競技者がどのようにしてスポーツと関わり合うようになるのか．なぜそのスポーツを続け，そして更に傾倒していくのか．学校を中心とした競技生活にはどのような特徴があるか，そして，引退後に競技キャリアが利用できる進路は何か，蓄積された競技キャリアはどのような意味を持っているのか，引退した競技者はどのように社会に適應するのか，などについて検討する．本研究では，スポーツへの社会化から引退後の生活までの彼らの人生をトータルにみていくために，ライフヒストリー法を適用しながら，各引退競技者に対して行ったインタビューの内容に対して考察を加えていくことにする．

1) スポーツへの社会化

先行研究においては，韓国の一流競技者の「スポーツへの社会化」に最も影響力があるのは教師，コーチや監督とされているが，その具体的な影響や社会的な背景は把握されてはいない．ここでは

韓国の一流競技者がどのようにスポーツに参加するようになるのかという「スポーツへの社会化」の過程を，より具体的に，そして社会的背景と関係づけて分析する．

まず，スポーツへの社会化のきっかけについて，元一流競技者は以下のように述べている．

A：『陸上を始めたのは中学校のとき学内体育大会でハーフマラソンに優勝．当時の体育教師に「練習して全北大会(県大会)に出てみる」と誘われ，本格的に競技に取り組み始めた．そして，県大会でも優勝を果たす．陸上競技で有名な高校からスカウトがあり，そこに進学した．高校ではいつも1位か2位を争う成績を上げていた...』

B：『ソウルにある小学校(当時：師大付属)2年生から競技を始めた．自分の専門とするスケート部はなかったが，江原道(寒い地方)から先生が来てくれて特別活動(週1回)としてスケートを教わった．動機は父母の勧めではなく偶然するようになったと思う．学校では，夏はローラースケート場を作り，陸上トレーニングまでやり，熱心に練習した．しかし，成績は大会に出ればほとんど，最下位だった．小学校6年生のとき初めて入賞するようになり，中学，高校では特待生として全国で1，2位を争ってきた...』

C：『ぼくが通った中学校には学校が推奨する種目としてその部(テコンドー)があって，約200名が部に入ってクラブ活動をしていた．それがきっかけだったと思う...』

D：『高校の時も周りの友達からとか，運動やれとか支えとかは全然なかった...また...周りの人たちからも誘いは全くなかった...家族は反対していて...経済的な力がなかったので何にも言えなかった...だけど...それは自分自身の問題だと思っていた...当時は学校に通うことさえ難しかった...それで，高校の体育の先生に...「先生と相談して授業料免除をいただけるなら運動をやります」ということで，専門的に競技を始めた...』

これらのことから，学生競技者を育成する機関は学校であり，彼らが学校のコーチや監督でもあ

る教師や非常勤コーチから影響を強く受けていることは、先行研究を支持するものといえる。韓国の一流競技者の「スポーツへの社会化」は、学校体育が媒体となっており行われている。民間クラブが活性化されていない韓国において、青少年が学校環境の中で競技スポーツに出会うのは極めて自然な現象ともいえる。

学校が学生にスポーツを積極的に奨励する背景には、法律による規定があげられる。国民体育振興法第2章9条により、学生の体力増進と体育活動の育成のために学校がとらなければならない措置が定められているのである^{注6)}。

また、学校側の広報戦略も関わっている。伝統的に競技者の育成を担当してきた学校では、学校長や運動部担当の先生の昇進が運動部の成績によって左右されている。そのためには、優秀な競技者を獲得し、高い競技成績をあげることによって、学校名を宣伝する効果がみられる。

さらに市、郡、道から推薦派遣されたコーチの多くは、元一流競技者であることが多い。彼らは、現役時代に世界のトップに到達することはなく、国内トップ競技者のひとりとして競技生活を終えた者が多く、その知名度から制度的なバックアップを受け、コーチとして派遣されている。また、彼らは、そこでの競技指導によって生計を立てており、自分が指導した競技者が成功することによって、奨励金や生活補助金をもらえることになっている。従って、指導する競技者の成績によって経済的な条件も大きく異なるわけである。そういった背景から、彼らは、「いわゆる競技力の高い“よい選手”を獲得しようと、学校の中で身体能力が優れた学生を熱心にスカウトし、指導することに躍起になっている。そこでは、自分が成し遂げることができなかつた“世界のトップに君臨する”という夢を、代わりに自分の指導する選手に果たしてもらいたいという強い意志も持っているようであった。

中島（1984）が家族とスポーツへの社会化の研究において、明らかにする必要性がある課題として「家族と同位または上位に仮定される諸要因との関連性」を取り上げた。そのような観点からみると、韓国も日本と同様に家族の社会化エージェントとしての地位は低い。これは松村（1984）が言うように日本では家庭生活の一部分としての

スポーツが登場するのは最近のことであり、このような傾向にある日本のスポーツが学校を場として展開してきたという歴史的事実があることから、韓国も日本の歴史的な影響で学校スポーツに重点を置くシステムになっていると考えられる。しかし、日本よりも韓国の方がより学校運動部の影響を強く受けているといえる。それは、韓国の「国家のスポーツ政策による学校の機能」、「低所得者階層の学生に対する体育特待生制度による進学機会の提供」、「指導者によるスカウト」といった要因によるものと考えられる。

韓国の一流競技者は、本人が自覚する前に身体能力を認められ、スカウトされ、一般学生と異なるルートを歩むことになる。そういった場合、学校の運動部の特性から、本来の学校生活に戻ることは難しくなってしまう。

2) 体育特待生の学校生活

韓国におけるスポーツの発展の歴史をみみると、学校の運動部がその中心になってきたことは明らかであり、多くの中学・高校の全国大会を始め、各種の競技大会から身体能力の優れた学生競技者がスカウトされ、体育特待生としての招へいを受けている。その背景では、「勝つために低年齢から専門的なトレーニングが必要」とされており、韓国の学校に存在する体育特待生はジュニアからトップアスリートを育てるために構成されたクラブ員であると位置づけることができる。

こういった体育特待生は、学校において授業を受けることを免除され、一般学生より学校の体育施設をより優先的に使用できる。小学校や中学校までは一般学生と同じく授業を受けているが、こういった状況は、高校に進学する際に大きく変わる。中学校での競技成績が全国及び市・道（県）規模の大会で3位以内であれば、体育特待生として高校に入学できる資格が得られるという。

大都市や道（県）には、市立や公立の体育専門高校があり、そこでは寮生活をするようになっていく。一般高校に進学した体育特待生の場合、寮生活をしている学生が多く、スポーツに費やす時間は、体育専門学校と変わらないくらい多い。そして、その高校体育特待生が大学に進学する際には、高校での競技成績が全国規模の大会で3位以

内であれば、体育特待生としての資格を獲得できる。しかし、資格を持っていれば誰でも入学できるというわけではなく、大学側からの選抜を受けなければならぬ。

このようなことから、韓国において学校運動部員はほとんど“セミプロ”であるといえる。彼らは世間からも将来はスポーツで生きていく存在として見られており、学校の運動部に所属していることで、学校内では一般学生とはある種異なる特別な存在として扱われている。そのため、学業との両立の必要性はなく、また、それを考える必要もないのである。

一方、一般学生の中で運動能力がある学生が入部することは不可能といえる。それは、学業を放棄し、厳しい訓練や規律に耐えなければならないことを意味しているからである。高校まで競技の実績がなく、一般学生として大学に入った後、急成長を遂げ、活躍している日本のトップアスリートのような例は、韓国ではありえない。また、学校外のスポーツクラブで活動する学生が試合に出るためには、所属する大学の学長の許可証が必要となる。そういったことを考慮すると、特待生以外の学生がスポーツ競技で活躍する場合は、多くの制限を受けているといっても過言ではない。

高校の体育特待生が大学に特待生として入学できる道は極めて狭く、その可能性は低い。大学では、学校の広報効果につながるようなトップ級の高校生競技者しか対象とはしていない。さらに、その競技者も人気がある種目に集中している。特待生の対象から漏れた場合、その選手が一般学生と同じ試験を受けて大学に合格することはほとんどない。そこでは、競技者であったことは、全く生かされることはなく、採点の際に、ほんの少しの加算点が加えられるのみであり、一般学生としての道は閉ざされているに等しい。

一旦、体育特待生として大学に入学すれば、ほとんどの学生は寮生活を送ることになる。学校の授業のプログラムへの出席は全く無視され、競技者の毎日の生活は、練習スケジュールに沿って行動しなければならない。必要とされる単位の取得は、学校関係者や体育系教授や指導者の配慮によってほとんど問題とならないのが現状である。

しかし、それも改善されつつある。国家代表選手を支援する団体の関係者は次のように話をして

いる。

F:『優秀な競技者は学校に行くことはない。頭に入っている知識も少ない。スポーツばかりしてはダメだと思う。だから、テルン選手村ではソウルの学校に所属している学生にはバスを出している。地方の中・高学生には夜間に先生を招き、一日3時間くらい勉強をさせている。地方の大学生は仕方がないが、ソウルの大学生は学校に行かせている。ソウルの大学は、体育特待生への配慮がなく単位を出さないからね...』

しかし、大学の特待生だったBの話では、根本的な教育システムが変わらないと学業とスポーツは両立できないという。

B:『うちの部は授業に出る、出ると言われたので出席したが、ラグビー、サッカー部は全く出てこなかった...自分が授業に出ても、基礎がないから、何を聞いても分からない。一般の学生は勉強して試験で入っているし、教授も一般の学生に合わせて授業を進めるから聞いていてもわかるはずがない...。そうだから...授業に興味を感じることもなく...次第に授業に出ないようになってしまった...』

韓国のスポーツ競技者に対して「スポーツバカ」という社会の意識は、これまでの国家の一流競技者育成に対する政策や学校側の特待生に対する歪んだ意識から発生してきているといえるのではないだろうか。しかしながら、体育特待生がこのような社会システムで再生産されることに疑問を感じる体育の関係者や知識人は少ない。そうシステムのあり方を批判することが、自らの社会的地位を脅かすのではないかと危惧するからであろう。

学校運動部はいわゆる“縦社会”によって成り立っており、軍隊生活をそのまま真似しているような嫌いがある。特に、高校や大学の特待生の寮生活は、まさに軍隊そのものである。寮生活ではないにせよ、学年差による厳しい“暗黙の”規律によって学校運動部は成り立っている。運動部の先輩は絶対的な存在であり、その指図には必ず服従することが義務付けられている。そういった環境に耐えることと、競技を続けることとはほとん

ど並立しているといっぴよい。

インタビューの中では、大学時代の生活について、次のような語りが認められる。

B:『高校までは創立されたばかりの部ということもあって、あまり厳しくなかった...しかし、大学に入ってから、近くにバットになるようなものであれば、何度でも叩かれた...あまりにもたくさん殴られたので、運動部を辞めようかと思ったこともあった。3年生になってからは学軍団(学生将校候補生)の2年次にまた殴られ、軍隊に行ったら学軍将校先輩にまた殴打された...』

C:『(先輩に叩かれるのは)毎日の行事だった。つくづく嫌気が差した...一日に100回も殴打されたこともある...本当に辞めたいと思ってときが何回もあった...でも、競技が続けたかったから我慢した...』

実際に寮生活は自分の種目の上級生だけではなく、他の種目の上級生の干渉を受けた。金(1996)の報告では触れられてはいないが、その生活は軍隊の生活そのままであることから低学年生にとってはつらい寮生活となってしまうこともしばしばある。そのため多くの競技者が学校を中途退学するか、途中で競技をやめてしまうこともあるという。

朴(1992)は、大学において体育特待生が授業に出席しないことを根本的に改善するためには、これに遡る小学校や中学校において、通常通りの授業出席を義務づけることが肝心であり、さらに、高校に進学しても競技活動と学業の両立を促すように、過多の試合と練習量による授業の欠席をなくすことが望ましいと主張している。また、学校授業の重要性を感じていない体育特待生が多い問題については、教育機関、指導者、家族、先輩達の関心を感化させることがまず必要ではないかと報告している。

そして、金(1996)は、体育特待生の学業活動に支障がないようにするためには、授業時間と練習時間の適切な調節、競技シーズンを夏・冬休みに行われるようにすること、そして、寮生活の効率的な運営をあげている。

韓国において、大学体育特待生は、既に中学校

や高校に在籍している時期から学校関係者や周囲によって“特別な学生”として扱われており、厳しい寮生活をしながら競技活動に従事している。そこでは、授業への不参加と引き替えに、スポーツをやることに対していろんな特権を享受しているといえよう。一方、学業によって競技力が落ちることを恐れている指導者がいる。それによって、中学・高校から大学まで体育特待生として進学した学生らは、授業よりもスポーツだけを追求することを許されている。しかし、彼らは体育特待生としてではなく大学への進学することの難しさ、途中で競技をやめた後の進路の狭さ、競技者として大学を卒業してもその後の社会進出することが難しいことなど、様々なリスクを背負っていることを充分認識してはいない。また、そのリスクを認識できたとしても、競技をやめて学業で一般学生と競争するためには、教育レベルは低く、遅れをとっていることは明らかである。

このようなことから、スポーツを国威宣揚のために幼いときから身体的に優れた学生を特別に待遇し、制度的にエリート・スポーツ選手として育成する国家のスポーツ政策によって維持されてきた韓国の体育特待生制度には、多くのリスクが伴っていることがわかる。

3) 社会的支援

韓国の一流競技者は、現役時代には国家の支援によって大きく支えられてきている。彼らは、学歴社会の中にあって、特待生制度によって学歴を代替獲得している。また、競技成績によっては、年金や奨励金などを手に入れることも可能である。しかし、特待生制度による学歴取得も競争が激化しており、高校特待生から大学特待生入学の際には、その2/3は対象者から外されている。国家の年金や奨励金支援はトップの一流競技者のみを対象にしており、その数は非常に少ない。その上、引退後においては国家的支援は全く行われていないのが現状である。

国家の支援に対してBは次のように語っている。

B:『個人をスポーツ競技者として育てるのは他の国よりも韓国は本当に良くやっているのかも知れない...しかし...総合的に見れば正しくはないと思

う。個人を完全に一つの分野の専門家（一方にだけ通じた道）にしか作れない。その人が競技を辞めたとき、他のことは何もできないくらいスポーツをさせている。個人が引退後その分野で活躍できる場を国が用意してくれるのであればよいが... そうではない場合は社会的に適応することは極めて困難だ...。現役時代、世界大会で金メダルを取るところまでいければいいと思っていたけれど... 数日前の新聞に載っていた某選手（オリンピック金メダリスト）をみればわかるように... 結局は、会社を首なっているからね。生きるためのお金くらいは儲けたと思っているだろうが... 行く末を考えると悩んでいるに違いない...。また他のことをやりたいと思っても... 他に知っていることもないし... もちろん同じ道を続けられれば問題はないんだけど... それが出来ない場合が問題だ。やはり他のことは知らないことが問題だろう... 異なる道に行っても成功するようにしなければならぬけど... あまりにも国威宣揚だけを考えて競技に専心化されすぎている。今、大学教授達が競技者にも勉強させようと主張しているのもこのような主旨だと思う... 他の道に行っても成功するように教育してやらなければならない... 一筋の道だけしか出来ないようにしてしまっているのではないか。そうではないか？ 学校でもお前は運動だけ熱心にやれと来たからね！ 今は、何がいいのわからない...」。

Bがいうように、国家がスポーツを国家宣揚に利用し、現役選手を支援する点についてはよくやっているといえるかもしれないが、その結果、作られたスポーツ競技者は現役を離れると社会に適応するには困難な状況に立たされることになる。国家が競技者の人生の全体を考えて、スポーツ政策を樹立し、展開することが、競技者の引退後の支援にもなるのではないだろうか。

企業の支援も現役の時に集中しており、引退後には全くなされていない等しい。一方、現役時代に家族の支援を受けることができるのは一部の種目に限られている。しかし、家族の支援は引退後にも経済的・精神的に続いており、元競技者にとって大きな支えになっていた。

現在、国内の経済危機によってスポーツ競技者は一層厳しい状況に置かれている。従って、国家や企業の支援に頼ってスポーツに全てを賭けてき

た現役選手は大きな衝撃を受けている。韓国の競技スポーツが国家の政策によって大きく揺れる現在の状況から、競技スポーツの基盤の脆さや危険性を感じ、多くの競技者が職を失いスポーツと関係のない社会で再スタートしている現状がそこには認められる。

4) 引退後の社会生活

一流競技者が学校を卒業し、競技者として社会に進出する道は、プロと実業団である。韓国のプロスポーツには、サッカー、野球、韓国相撲、バスケットボールがある。高校を卒業したトップ選手がプロに直接入るケースは少なく、野球以外はほとんどない。大学を卒業した競技者は、国営チーム、金融会社チーム、財閥チームなどの実業団チームやプロに入る。前述した国営チームでは事務と競技を両立させ、競技引退後は公務員として働く。しかし、そのチーム数も少ない。金融チームは中・小企業が多く、保有している種目は限られている。午前中は業務で、午後に競技練習が組み込まれている。そして、引退後は金融各社の行員として働けるようになっている。財閥企業チームは、大学のトップ選手を莫大な金額の契約金でスカウトするが、引退後の就職においてはいくつかの例を除き保証されていないのが現状である。

知名度がそれほど高くない競技者の場合、競技キャリアがさらなる高学歴取得に結びつかなかったり、あるいは、その競技キャリア自体が、生かされないこともしばしばある。そのような者の場合、引退後、社会に適応することが困難を極めてしまう。

そういった一流競技者が、引退後の社会に適応していく過程は三つに分けて論じることができる。

一つは、競技キャリアを生かしてスポーツ関連職業に留まるケースである。このケースの場合は、自分の競技のコーチ、審判、学校の教師などであるが、コーチの場合はほとんど自分が活躍していたプロ球団や実業団で指導者に就く。徐（1997）の、スポーツ関連職業に就いた元プロ選手のインタビュー調査では、現在の職業での不安事項として「一生の職業ではない」、「報酬が少ない」、「勤務環境が悪い」、「自分が全てを処理しなければならない」、「新しい環境への適応」などを順番に上

げている。

実際にコーチとして8年間勤務した経験があるGさんはコーチの職業について次のように語っていた。

著者：運動していた頃は、将来的に運動に関わっていくということとは考えなかったんですか？

G：『そうですね、なかったです。それはなぜかという...自分がコーチ達のことを、よく見ていたから...コーチもしたけど、コーチの収入っていうのは...ものすごく低いんです。家族を養いながらコーチをするのは無理...そういうことで...あの...お金をも儲けるということにかけた...かけて自動車会社に入った』

引退後に競技指導者として職に就くことは、一見、順調な適応に見えるが、諸々の条件が悪い上にその職を継続できるかどうかは指導した競技者の成績によって決まる場合が多い。そのようなことから、これを一時的な職業に過ぎないと考える者が多いことも頷ける。

二つ目は、企業の競技者として活動し、スポーツと関わりがない職業に就くことである。その際、次のようなインタビューから、元一流競技者は営業部門に就く場合が多いようである。

著者：一流競技者が引退した後、その競技キャリアが社会にどのように生かされると思いますか？

スポーツ協会関係者：『現役時代に相当な成績を挙げた競技者は、引退後、相当な評価を得ている。なぜなら競技をする精神・闘志そして執着力...このようなものが職場で生かされており、いい評価を得ているのだと思う。例えば、ロサンジェルス・オリンピックの金メダリストは、ある会社で課長をしているが、実績が全国1位であるという。つまり...保険に加入させる数が全国1位になるくらい...そのような元競技者もたくさんいるんじゃないかな...』

著者：名声があるから営業職で社会の看板として歩き回り、顔で実績をあげることがあるのでは...

スポーツ協会関係者：『そう、顔だけではなく、自分も努力するから...。相当な成績を挙げた競技者はそうだな...、それは運動を熱心にやったからそのような成績を挙げたわけだから...我が国がスポーツで全種目に渡って上位にランキングされたわけではなく一部だけがランキングされており、平等に発展してない。大部分の選手は職場で熱心に働いている。例えば、元一流選手はある会社には6,7名いる...彼らを西大門ある地域へ団体で派遣してみたら、成績がものすごく上昇した...。会社側としても本当に喜んでいる。運動もするし、仕事もできる...それは本人の意志によることで...スポーツをやるときの情熱があれば成功すると思う。ある競技者は...引退して...学位をとって大学教授になっているからね...』

このような元競技者は、主として競技で培った精神力を武器に、仕事の面でも活躍している。また、営業職では、かつて有名競技者であったという名が大きなメリットとなっている。しかしその一方で次のような意見もある。金融会社所属のサッカー選手として活動し、引退後には銀行の行員として働いているF氏は次のように語った。

H：『最初は、講演をやって回ったり、大きな商談に付いていって知名度を生かして契約を取り付けたりしたが...5年くらい過ぎて、ようやく行員として働きはじめ...今こうしてやっと支店長になれた。今まで競技者出身で入社し、最も出世したのが支店長までで...僕を含めて3人しかいない。業務職は難しいから辞める人も多い...』

一流競技者は、いわゆる体力とバイタリティーが生かされる営業職では活躍できるが、知識や管理能力が必要とされる管理職では通用しないのが定説となっている。そこでは、大きな出世は望めないのである。従って、専門的知識などが求められる事務職には適応できないことも多いようだ。

三つ目は、特待生として大学を卒業し、同時にスポーツと関わりがない職業に就くケースである。ほとんどの特待生がスポーツキャリアを生かすことができずに社会に出ていく。プロや企業にスカウトされない人は、競技キャリアを生かして企業に就職することは難しい。一部は中学・高校のコ

ーチや監督になるが、それ以外は家の事業を引き継ぐか、個人で事業を興すか、もしくは、営業職に流れるケースが多い。その際、頼りになるのは、ほとんどの場合が競技生活の時の知人たちの人脈である。

ところで、彼らは、自身の競技体験をどのように捉えているだろうか。それに関連して、競技キャリアが社会生活に役に立つかという質問に元一流競技者は、以下のように答えている。

B：『一流競技者だった人は...社会でもよく生活していると思う...。これは一流競技者ではなかった者が社会に適応していないという話ではなく...かつて一流競技者であった者が、自分の生活を充実させている...一生懸命に生活している人も中には見かける。一人前の競技者になろうと熱心に努力してきたことが、何らかの形で社会にもよく役立っていると思う。個人的にはいい経験をしたと思う...こんなことは、他の人では経験できない...挫折したときや辛いとき、他の人もやっているのに僕はなぜダメなのか...そんなふうに精神力が辛いとき...うまく行かないとき...我慢して乗り越える力は競技生活で養われたと思うから...精神的な面では大きなプラスになったと思う...』

A：『人々は競技やっているときはよく声をかけてくれた...しかし、時間が経って...今となっては、声をかけてくれることも少ない。競技者ではない今は...「お前には何にも無いじゃないか」という目でみているように思う。競技をやっているうちは有名だった...しかし...現役でなくなったときは一般人と何ら変わりはない...』

これらのことから、現在の生活状況が悪くても一流競技者であったというプライドを持っており、競技生活に対して肯定的なコメントを得ることが多かった。引退後、就職をした初めのうちは競技キャリアが周囲に高く評価されても、時間が経過するに連れて社会的な知名度が薄れていき、結局は、競技キャリアは認められなくなっていくようである。

5-4. まとめ

スポーツ選手のプロ化が進む中で、一人の一流競技者が輩出される裏には多くのスポーツ競技者の途中離脱がある。さらに、頂上に至る一人の一流選手が誕生するためには、選手やコーチの個人レベルでの努力はもちろんのこと、国家的、社会的に強力なバックアップは不可欠であろう。事実、歴史が浅い韓国の競技スポーツが世界でスポーツ強国といえるまでに急成長したのは、国家の強力なバックアップがあったからこそといえる。第3共和国以後、国家が政策的に学歴社会を利用した体育特待生制度、年金制度、兵役特恩制度などで競技スポーツを支え、短い期間の中で過去4大会のオリンピックで世界ランクの10位以内に入る好成績を収めているのである。

ライフヒストリーからみると、韓国一流競技者達の中には、韓国社会の中で恵まれない家庭に生まれた者が多く、競技を始めるようになったきっかけは学校のコーチ・監督、教師、父母の勧めによることが明らかとなった。彼らは、中学校と高校の進学の際には、体育特待制度によって試験が免除され、授業料や奨学金を受けていた。学校生活において体育特待生は、ほとんど午前中のみ授業を受け、午後には練習が行われており、特に、重要な試合の前には、ほとんど授業に出席しなかった。それが影響して、一般学生との実力差は開く一方で、たとえ授業に出席したとしてもその内容についていけず、結局、学習への意欲をなくしてしまうことが多かったようである。また、大学に体育特待生として進学するためには高校での競技成績が全国規模の大会で3位以内に入らなくてはならず、そうなると、高校の体育特待生の約3分の1しか大学に進学できなくなる。それも、バスケットボールや野球などの比較的人気のある種目の競技者が中心であった。高校や大学の体育特待生は寮生活が義務づけられている学校がほとんどであるが、その寮生活の規律は軍隊生活の多くと類似しており、特に下級生にとっては、過酷な生活であるといえる。これが原因で中途離脱するものも少なくはない。大学卒業後の社会進出は、一部のプロや実業団に限定されており、特に、希望通りの進路先が得られるのは、比較的人気のある種目の高い競技レベルの競技者や世界大会で入賞した競技者に限られていた。

引退後に、大学卒業のキャリアを利用して、大

学教授になった者もいるが、その数は極めて少ない。また、競技者としての名声を利用し、企業の宣伝塔としてステータスの高い職に就いている者もいる。このようなケースを踏まえると、韓国において、高い競技キャリアは、上昇的な社会移動を可能にすることが認められる。しかし、そういった競技成績による知名度は、社会進出直後には、生かされることがあっても、大抵の場合、時間の経過と共に薄れ、次第に役に立たなくなってしまう。

韓国の元一流競技者のライフヒストリーを探ってみると、彼らは、幼いとき身体能力が優れた特別な存在としてスカウトされ、競技キャリアを継続していくことがどれほどのリスクを含んでいるのかを知らないまま、競技に傾倒していった嫌いがある。国家の国威宣揚のために学歴を利用した特待生制度や、オリンピック・世界大会への入賞による年金制度、兵役免除制度などを介して、社会的な出世のために競技キャリアを利用する者もいる。スポーツ競技が国家の政策として利用された結果、韓国の競技スポーツ界は大きなリスクを内包したギャンブル性の高い世界になったのではないだろうか。

また、国家の国民体育向上のため存在するというエリート・スポーツや学校の体育特待生制度は、教育を受けることの軽視を促し、一般社会からの乖離を伴い、益々競技者達の社会適応を困難にしていると考えられる。韓国のスポーツ競技界の将来を見据えるとき、国家やスポーツ関係者は、個々の競技者がスポーツを通じて蓄積したキャリアを、如何にして社会に活用できるかについて検討すべきであり、そういったことを可能せしめる制度的な支援対策を講ずるべきであろう。

注

1) 現代をスポーツが「経済」・「政治」の世界に大きく影響を及ぼす時代としてみている。こうしたスポーツと他の領域の相互浸透に対して「スポーツの現代化」と定義している。しかし、「するスポーツ」の量的な拡大は頭打ちである一方、「見るスポーツ」の肥大化が顕著である。これは、「メディア・イベント」が人々のスポーツ消費を拡大し、そうした創られた「スポーツ需要」がこの「現代化」を加速し

ているのである。(松村和則、佐藤利明『「スポーツの現代化」と地域振興—南会津地方におけるスポーツディベロップメントの社会的実証研究—』、筑波大学「スポーツの現代化」研究会、pp.1-4.1991年。松村和則、「『過剰』なる現代社会と身体・スポーツへのパースペクティブ」、『山村の開発と環境安全』、pp.234-256.1997年。)

2) 現代における近代スポーツの特徴に関してスポーツの生産と消費、あるいはスポーツの需要と供給とのあり方が変わってきているという視点の下に、ブルデューは「スポーツが貴族から庶民のものになったことと、見るスポーツとするスポーツがすっかり分かれて行くようになったこと、アマチュアリズムからプロフェッショナリズムへの変化が起きていること」この三つの現象を上げている。(田原音和、「スポーツはどんな社会現象か」、『スポーツ社会学研究』、p.1, 1993。)

3) 純粋なアマチュアリズムは、(1) 公正な競争を実現するために費やす時間とエネルギーを、適度なスポーツ練習という限界内に制限することに同意しなければならない。(2) 自分のスポーツ種目に関連がない職業を持ち、時間とエネルギーと興味の大部分をその職業に費やす人である。(3) 選手が名声を利用して資金を得ることを禁止することである。(J.スコット著、片岡暁夫訳、『現代スポーツへの警告』、不味堂出版、pp.131-144, 1976。)

4) トーマスとズナニエツキは「生活史(ライフ・ヒストリー)」を社会理論形成のためのデータを提供するものとして使っている。生活史を用いる利点としては以下の四点に利用されていると論じている。第1に、態度と価値を特徴づける基本的な役目に優れた力を発揮する。第2に、抽象的社会法則を確かめる法則定立的な目的にもよく適ったものである。第3に、ある態度の来歴を跡づけることができ、一連の経験を通してその進化を理解することができることである。第4に、個人的進化の全過程を理解し、そこで社会的パーソナリティの性質を確かめ、それを一つの類型として特徴づけるという特有な価値を持っている。(W.I.トーマス・F.ズナニエツキ編著、桜井厚訳、『生活史の社会学』、御茶の水書房、pp.186-189, 1983。)

5) 上流社会階層が自分の子どもを運動選手にさせない理由として三つを上げている。一つは、人間の精神を崇めて労作を卑しい職とする伝統的な価値観により、身体活動を主にするスポーツ人は理解されず、また運動生活は他の知的生

活に比べ経済的，社会的に将来性が無いとされていること。二つ目は，運動生活を終え，社会に進出したとき職業や身分がほとんど保証されていないこと。三つ目は，運動による障害に対する対策の不備，学校の成績と無関係に特待生にし，社会の低所得者が掛け金としてスポーツに参加すること。権寧集，「運動選手の社会階層の調査分析」，漢陽大学教育大学院修士論文，1983年。

- 6) 国民体育振興法第2章第9条は次のように定められている。
第9条(学校及び職場の体育振興): 国及び地方自治団体は，特に学校及び職場の体育振興に必要な施策を講究すべきである。学校及び大統領が定める職場は，学生及び従業員の体育振興に必要な措置を講究し，体育振興管理委員会を設置し，学生及び従業員の体育を指導管理しなければならない。

文 献 (Reference)

- 朴ヒョン権(1992)「体育特待生の授業実態に関する考察」，慶北大学学校教育大学院修士論文。
- Coakley, J.(1983). Leaving competitive sport : Retirement or rebirth, *Quest*, 35, 1-11.
- 海老原修(1992)「役割の取得と喪失からみるスポーツにおける引退」，*コ-チングクリニック* Vol.6, No.4, pp6-11.
- Greendorfer, S.L.(1986). The Dropout Phenomenon: Sociological Perspectives. Un-published paper, 17, Refs: 20.
- Greendorfer, S.L., & Blinde, E.M.(1985). Retirement from Intercollegiate Sport: Theoretical and Empirical Considerations. *Sociology of Sport Journal*, 2, 101-110.
- Haerle, R. (1975). Career patterns and career contingencies of professional baseball players. In J. Loy & D. Ball(Eds.), *Sport and the social order*(pp.457-519). Reading, MA: Addison-Wesley.
- Hill, P., & Lowe, B.(1974). The inevitable meta-thesis of the retiring Athlete. *International Review of Sport Sociology*, 9(3-4), 5-29.
- 洪承厚(1993)「運動選手の社会移動に関する一考察」，高麗大学大学院博士学位論文。
- Houlston, D. R.(1982).The Occupational Mobility of Professional Athletes. *International Review of Sport Sociology*,2(17), 15-27.
- 甲斐健人(1998)「学歴社会における高校部活の文化社会学的研究」，筑波大学大学院体育科学研究科博士論文。
- 権寧集(1983)「運動選手の社会階層の調査分析」，漢陽大学教育大学院修士論文。
- ケン・プラマー(1991)，田原勝弘外2名監訳，『生活記録の社会学』，光生館。
- 金ジョンイェ(1996)「体育高等学校の学生らの学校生活実態に関する研究」，漢陽大学学校教育大学院修士論文。
- 李桓哲(1979)「運動選手の社会階層に関する研究」，東国大学行政大学院修士論文。
- Leonard, W.M.(1980).A sociological perspective of sport. Minneapolis, MN: Burgess Publishing Company,91-98.
- Lerch, S.(1981).The adjustment to retirement of professional baseball players.pp.138-148 in Greendorfer and Yiannakis(Eds.),*Sociology of Sport: Diverse Perspectives*. West Point, N.Y.: Leisure Press.
- Lerch,S.(1982).Athletic Retirement as Social Death: an overview, In N. Theberge & P. Donnelly(Eds.), *Sport and Sociological Imagination*(pp.259-272). Fort Worth, TX: Texas Christian University Press.
- Loy, J.W.(1972).Social Origins and Occupational Mobility Patterns of a Selected Sample of American Athletes. *International Review of Sport Sociology*,5-25.
- 松村和則編(1997)『山村の開発と環境保全』，南窓社。
- 松村和則(1984)「日本の家族変動とスポーツ」，桑野豊編著，『スポーツ社会学講座2 現代社会とスポーツ』，不昧堂出版，pp52-67。
- McPherson, B. D.(1980)Retirement from professional sport: The process and problems of occupational and psychological adjustment. *Sociological Symposium*, 30, 213-230.
- Mihovilovic, M.(1968).The Status of Former Sportsmen, *International Review of Sport Sociology*,3,73-93.

- 中込四郎(1996)「競技引退後の同一性再確立の過程」, 平成6-7年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書.
- 中島信博(1984)「家族とスポーツへの社会化」, 糸野豊編著, 『スポーツ社会学講座2 現代社会とスポーツ』, 不昧堂出版, pp40-52.
- 中条一雄(1987)「特集; エリート・スポーツ選手育成の問題」, 『エリート・スポーツと選手育成の問題』, 体育の科学, 37(12), pp907-911.
- 中野卓・桜井厚編(1995) 『ライフヒストリーの社会学』, 弘文堂.
- 西所正道(1996) 『五輪の十字架』, NHK出版.
- Ogilvie, B.C., & Howe, M.(1986).The Trauma of Termination from Athletics. Applied Sport Psychology: Personal Growth to Peak Performance, 365-382.
- 呉柱勲, (1993)「エリートスポーツ競技者のスポーツ社会化に関する研究」, 嶺南大学大学院修士論文.
- Petitpas, A., Danish, S., Mckelvain, R., & Murphy, S. (1992). A Career Assistance Program for Elite Athletes. Journal of Counseling & Development, 70, 383-386.
- Rosenberg, E.(1981).Professional Athletic Retirement. Arena Review, 5(2),1-11.
- Rosenberg, E.(1981). Gerontological Theory and Athletic Retirement. In S.L. Green-dorfer & A. Yiannakis(Eds.), Sociology of Sport: Diverse Perspectives. West Point, N.Y., Leisure Press, 25, 118-126.
- Rosenberg,E.(1982). Athletic Retirement as Social Death: Concepts and Perspectives. In N. Theberge & P. Donnelly(Eds.), Sport and Sociological Imagination(pp.245-272). Fort Worth, TX: Texas Christian University Press.
- 柳根林(1988)「運動選手のスポーツ社会化過程に関する研究」, 漢陽大学大学院博士論文.
- 佐藤郁哉(1992) 『フィールドワーク』, 新曜社.
- 徐珍教(1997)「引退したプロ選手の社会適応に関する研究」, 漢陽大学大学院博士論文.
- Smith, M. A.(1987,October). Life after Hockey. Coder Books.
- スコット:片岡暁夫訳(1976) 『現代スポーツへの警告』, 不昧堂出版.
- Sussman, M.B.(1971). An Analytic Model for the Sociological Study of Retirement, "Retire-ment", Carp F.M.(Ed), New York, Behavioral Publications Inc.
- 田原音和(1993)「スポーツはどんな社会現象か」, 『スポーツ社会学研究』1,21-31.
- Tamara Kopecka(1992)「女子選手の早期引退の理由」, コーチングクリニック, Vol.6,No.4, pp12-16.
- Tate, G.F.(1994). The Effects of the Transformation in the Olympic Games on the Athletic Retirement Transition Process: American Olympians and Retired National Football League Athletes. Microform Publications, International Institute for Sport and Human Performance, Univ. of Oregon, Eugene, Ore, 3 Microfiches(276 ft.)
- トーマス, W.I., ズナニエツキ, F.: 桜井厚訳(1983) 『生活史の社会学』, お茶の水書房.

本研究の一部は、平成11年10月日本体育学会第50回記念大会において口頭発表された。

